

「タブーはある」と編集長は断言した（『新聞研究』がボツにした原発報道批判記事・後編）

ルポライター・明石昇二郎
【『週刊金曜日』2011年8月5日号掲載】

日本新聞協会の機関誌である『新聞研究』編集部によれば、同誌の発行部数は約一万部。主な読者層は、新聞社など大手マスコミの経営者や社員なのだという。

同誌編集部からの執筆依頼に対し、筆者が懸念したのは「原稿を書いても本当に掲載されるのだろうか」ということだった。しかも、原発に潜むさまざまな問題をルポし続けてきた結果、電力各社から「蛇蝎だかつのごとく」嫌われている筆者に対し、「メディアはどういう視点で福島原発事故を報道すべきか論じてほしい」との注文である。当時、多忙を極めていたものの、同誌の若い編集者

Q 君の熱意に絆ほだされ、協力することにした。

が、初校ゲラを戻した直後から雲行きが怪しくなり始める。予定の期日を過ぎても再校ゲラが出てこないのだ。そして七月二三日、『新聞研究』の「キムラアヤコ」編集長から電話がかかってきた。「残念ながら今回掲載を見送りたい」のだという。

『新聞研究』には
タブーがあります

キムラ 今回書いていただきました論旨につきましては非常に示唆しきに富んでおりまして、まさにこれまでの原発報道についてはメディア自身も

そう思っていると思えますが、ただ、いくつかの表現が『新聞研究』読者にとりましては、不要な反発ですとか、あるいは不要な誤解とかを生む恐れがあると。

明石 具体的にはどの部分ですか。キムラ 大熊さん（元朝日新聞記者の大熊由紀子氏。朝日新聞社刊『核燃料―探査から廃棄物処理まで』の著者で、原発推進派）へのご批判なども事実としてはあったんですけども、本当にこの部分が必要なかどうかというところで、編集部の中

でも意見が分かれたんです。明石 どんな論考であろうと「反発」される方はいらぬと思います。そもそも執筆をお引き受けする際、「私自身にタブーはない」と説明させていた

だき、それでも執筆を、というお話だったので、書かせていただいたわけです。キムラ あ、そうですか。『新聞研究』

には、タブーはやはりあります。明石 「タブーがあります」なんてあっさり言わないほうがいいと思います。キムラ これから『新聞研究』でもやっていかねければならない重要なテーマでありますので、今回の明石様のご趣旨は（今後の）企画の参考になったという意味では大変貴重なところではあるのですが、八月号での掲載につきましてはちよつと見送りたい。

明石 貴誌のタイトルは『新聞研究』です。ならば、多少耳の痛い話であるろうと、福島原発事故取材に関わる記者にとつて参考になるような原稿でなければならぬと思ひ、出稿したんですけどね。

キムラ よく読むとそういう配慮があるなと思つてはいるんですけど、編集部の考え、あるいは上部の考えもありまして、「表現がきついな」というのが上部の判断でもあったもの

ですから。
明石 この程度の原稿が載せられないのであれば、私の問題提起を今後の『新聞研究』誌面に活かすことも難しいでしょう。
キムラ いや、私も精一杯やっているのかなとは、戦っていいのかなとは思っておりますけれども。

そもそも明石に執筆依頼したのが間違っていた？

国難の最中にある今、キムラ編集長にとって「気を遣うべき相手」とは、新聞の読者やテレビの視聴者ではなく、『新聞研究』の読者なのだろう。しかも、今から手を入れようが不掲載の決定が覆る可能性はないとまで言われた。こんな形で「最後通牒」を突きつけられるのは、ライター歴二〇年以上の筆者にとっても初めての経験である。

明石 これまでの原発報道を批判的に検証してほしいというご依頼だったので、ご期待に沿うべく原稿を書いたわけですが、それは私の勘違いだったわけですか？
キムラ 趣旨については勘違いではないです。明石さんのルポも、昔の『朝日ジャーナル』も拝見しましたし。そういう意味では、批判をしていただくにふさわしい人だと思っております。
明石 これは何も新聞社の経営者の方たちだけに読んでもらいたいと思つて書いたものではなく、広く一般の方たちにも読んでもらえたらと思つて書いたんです。
第二次世界大戦で日本のマスメディアは大政翼賛報道をし、お上に楯突くどころか戦争の旗振り役を率先して果たしてきたわけです。しかし

戦後、手のひらを返して「反省した」と言い、毎年夏頃になれば戦時中の報道を自ら批判したりするので、今回の原発事故報道にも大変似通ったものを感じているわけです。

キムラ まさにご指摘のとおりで、メディアは過ちを繰り返してはいるんです。戦争のことも含めて。ご指摘の部分については全くそのとおりだと。

明石 大事なのは、そうした過ちを犯していないジャーナリストもいるということ。新聞社の中にもテレビ局の中にも、フリーランスにもいるわけです。でもその一方で、確信的に間違いを犯してきたような「ジャーナリスト」が山ほどいる。キムラ そうですね。

明石 そういう人たちからも反発されない「予定調和」の原稿を書いても、意味がないんです。私の原稿に反発すること自体が、これだけの国難が起きて何ら反省していない証拠とも言えるでしょう。

今回の福島事故発生当初の報道はそれこそ「大本営発表」みたいになっていました。そうした中、記者たちは戦い続け、当初は紙面に載らなかったような記事が少しずつ載り始めています。上司から圧力がかかり、記事を出稿しても載らなかつたのが、日々の格闘の結果、載り始めている。そうやって頑張る記者さんたちを応援する気持ちも込め、原稿を書いたんです。

キムラ 戦う編集部になるべく、参考にしたと思います。

明石 でも、私に対しての原稿依頼は、多分もうないわけです。

キムラ いや、それはもう……ないとはもちろん言い切れない。非常に鋭い指摘もたくさんあり、私としてはこれをもとに企画を練ろうかなと考えております。

*

『新聞研究』編集部の今後の発奮を期待したい。

例を挙げるまでもなく、ジャーナリズムが国民から信用されていない国は、民主主義国家として二流の扱いを受ける。そして今、東京電力福島第一原発事故に関する報道に対し、日本には不信感が渦巻いている。

そのおかげで、筆者が今、講演をすれば、会場から、

「今のマスコミは政府や電力の広報機関に成り下がっているが、どう思うか？」

といった質問を浴びせかけられるのが常となった。こうした事態は、日本の国民にとって不幸以外の何ものでもない。

しかも今回、筆者が見舞われたのは、自ら依頼した原稿を「上部」からの圧力によってボツにするという、

言論の自由にも関わる事態だ。敢えて本誌先週号での全文掲載に踏み切った理由は、まさにその一点にある。

さらに付け加えれば、「編集部の上部」とは日本新聞協会のことであり、自らへの批判を検閲して封殺することとは、言論機関の「元締め」としての自殺行為に他ならない。

通常の言論機関では考えられないことだが、ボツにされる以前の拙稿は同誌編集部員以外の同協会関係者、すなわち現役の新聞記者たちの「チェック」まで受けていた。ボツになった経緯を含め、大学等の新聞研究者には是非「研究」していただきたい事例だと思う。

配信元…ルポルタージュ研究所

Copyright (C) 明石昇一郎、ルポルタージュ研究所

URL : <http://www.rupoken.jp/>